

BRIDGESTONE

2023

Suzuka 4 hours

2023ブリヂストン鈴鹿4時間耐久
ロードレース<ST600>

IP 250

2023 JP250

DUNLOP
OFFICIAL TYRE SUPPLIER

4時間耐久ロードレース

■開催概要

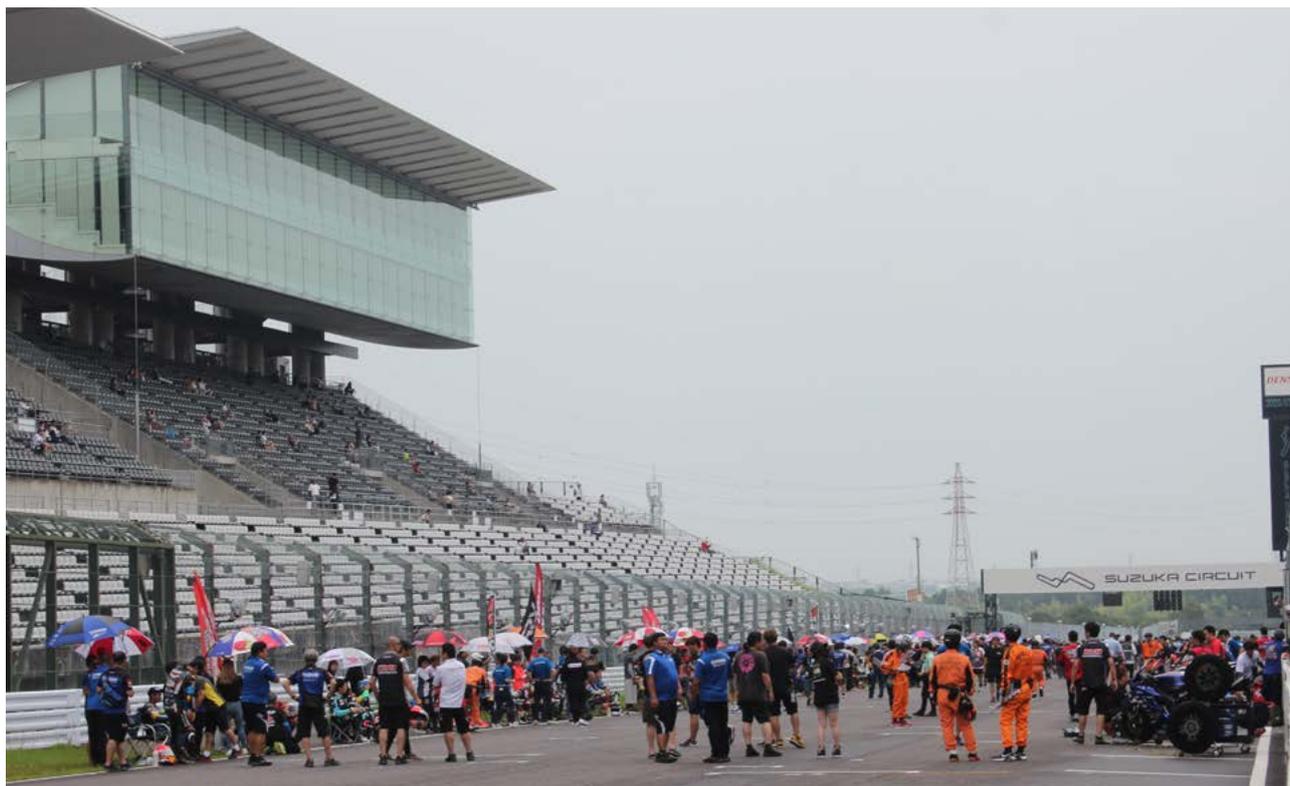
- 名称 : 2023ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>
2023 JP250 4時間耐久ロードレース
- 主催 : ホンダモビリティランド株式会社 鈴鹿サーキット
- 会場 : 鈴鹿サーキットフルコース(5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数/73台
ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>……37台(インター 17台、ナショナル 20台)
※ST600R登録はインター 4台、ナショナル 6台
JP250 4時間耐久ロードレース……36台(インター 11台、ナショナル 25台)
- 開催日 : JP250 4時間耐久ロードレース
7月8日(土)公式予選/決勝レース
ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>
7月8日(土)公式予選、9日(日)決勝レース
- 天候/路面 : (8日)曇り/ドライ、(9日)曇り/ドライ



★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。
https://www.suzukacircuit.jp/result_s/



★レース写真は、バトルファクトリー様のHPで
ご購入いただけます。
<http://www.battle.co.jp/>



9日(日)の<ST600>スターティンググリッド風景

BRIDGESTONE 2023 **Suzuka 4 hours** 2023ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>

IP 250 2023 JP250
DUNLOP 4時間耐久ロードレース
OFFICIAL TYRE SUPPLIER

熱いドラマが繰り広げられた2つの4時間耐久。 特にブリヂストン鈴鹿4耐<ST600>は劇的な展開に!!

“コカ・コーラ”鈴鹿8時間耐久ロードレース第44回大会が開催される8月4日(金)～6日(日)までひと月を切った7月8日(土)・9日(日)、JP250 4時間耐久ロードレースとブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>が開催された。

JP250は2016年にはじまった入門カテゴリー。次世代のスプリントレースとして開催初年度から注目を集めると、翌2017年にはここ鈴鹿サーキットで早くも4時間耐久ロードレース(以下4耐)がスタートし、それ以降この4耐は鈴鹿サンデーロードレースの中で開催されてきた歴史を持つ。

参戦マシンの改造範囲が厳しく制限され、タイヤもダンロップのワンメイクということで、イコールコンディションならではの接戦が展開されてきたこのカテゴリーの4耐は今年も「インター4hours」(MFJ国際・国内のライセンス保持者が混在するチーム)、「ナショナル4hours」(MFJ国内ライセンス保持者のみのチーム)の2クラス混走によって行われ、公式予選ではA・Bグループともに激しいタイムアタック合戦が披露された。また、決勝レースでは軽量級クラスならではの激しいバトルが1回目のピットインまで続いた。

鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>は1980年にスタートし、2017年から準国際格式となった耐久レース。今年は「ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>」という大会名称で行われた。

この<ST600>4耐も参戦マシンの改造範囲が厳しく制限され、タイヤはブリヂストンのワンメイクのため、毎戦熱いバトルが展開されてきたが、近年はアジアの有力チームの参戦もあり、バトルがさらに激化。2013年に初参戦して総合優勝を飾ると2016年も総合優勝を果たしたインドネシアのASTRA HONDA RACING TEAMが今回も参戦した。

レースは「インター4hours」(FIMライセンス・MFJ国際ライセンス保持者を含むチーム)、「ナショナル4hours」(MFJ国内ライセンス保持者のみのチーム)の混走で、旧型モデルを対象とする「ST600R」には申告登録する。レースは、公式予選で転倒し、最後尾からのスタートとなったYamaha Racing Indonesia Gen Blue Teamが総合優勝を飾るという劇的な展開になった。同チームのRider BLUEが怪我を負ったため、急遽招集された松岡玲は昨年に続き2連覇を果たした。また、辻本範行、樋口幸博ら、このカテゴリーの4耐とJP250 4耐にダブルエントリーするライダーがいたのもトピックだった。

両レースともに蒸し暑い気候の下、熱いバトルが展開された。8月4日(金)～6日(日)の鈴鹿8耐でも熱く迫力のあるバトルが繰り広げられることを予感させる2日間となった。



2023 JP250 4時間耐久ロードレースのスターティンググリッド



2023 JP250 4時間耐久ロードレース レースレポート

鈴鹿サーキットを舞台に行われる耐久レースの内、裾野を広げるレースとして知られるこのカテゴリーの4耐は7月8日(土)の1DAYで公式予選と決勝レースが開催された。

親子や兄弟でコンビを組み、レースを楽しもうとするチームや必勝体制を築くチームがあったこの4耐には、Thai Hondaと伊藤真一氏率いるSI Racingがコラボしたその名もThai Honda with SI Racingが参戦。伊藤氏が監督を務めるチームから全日本選手権ST600に参戦した経験を持ち、今シーズンはアジアロードレース選手権で活躍中のMUKLADA SARAPUECHがRider BLUEとして出走した。

レースは13時30分、ル・マン式によってスタート。ポールポジションスタートの中澤(笠井杏樹/中澤皓平組)がオープニングラップから早くも後続を引き離しにかかる。中澤、2番グリッドスタートのSARAPUECH(MUKLADA SARAPUECH/JAKKREEPHAT PUETTISAN組)、6番グリッドスタートの福井(福井宏至/小林誠組)、5番グリッドスタートの保坂(大窪征文/保坂洋佑組)、12番グリッドスタートの高橋(高橋匠/花木沙智組)、7番グリッドスタートの三浦(三浦雄一/井手瑤輔組)のオーダーでオープニングラップを終了。3周目になると中澤、高橋SARAPUECH、保坂の4台が後続を引き離し、トップグループを形成する。

5周目にSARAPUECHが中澤をパス。同じく中澤をパスした高橋がSARAPUECHをも抜いてトップに立つ。その後もトップ4台が何度も順位を入れ替えるバトルを繰り返しながら、スタート8周目にバックマーカーが出現。同じ頃、西コースで雨が降り始めるが、路面を濡らすまでには至らない。

トップグループではまずSARAPUECHが23周目終了時点でピットイン。PUETTISANにライダーチェンジする。保坂が25周目終了時点で、中澤が28周目終了時点でピットインし、それぞれ大窪、笠井にチェンジ。同じ頃、PUETTISANがエンジンの不調を訴え、イレギュラーのピットイン。トップを走る高橋は31周目終了時点でピットに入り、花木にライダーチェンジする。

トップ集団が1回目のピット作業を終えた後は大窪、笠井、3番グリッドスタートの津田(津田雄飛/田中啓介組)、SARAPUECHのオーダーに。しかし、トップ独走状態となっていた大窪が48周目の130Rで転倒。53周目終了時点で津田がピットインし、田中にライダーチェンジする。笠井も56周目終了時点でピットに入り、中澤にチェンジ。57周目の130R進入でSARAPUECHが田中をパスする。

最後のピット作業を終えた後の上位3台は笠井、PUETTISAN、津田のオーダーに。独走状態を築いた笠井/中澤組が総合優勝を飾ると同時にインター4hoursのウィナーに。ナショナル4hoursを制したのは総合4位の橋本範行/遠藤弘一組だった。



グリッドは公式予選における2名の平均タイムによって決まる。笠井杏樹と中澤皓平がコンビを組んだK0 Electronics & NOJIMAがポールポジションを獲得



2023 JP250 4時間耐久ロードレース



JP250 4時間耐久ロードレース/インター4hours表彰式 (優勝: 笠井杏樹 / 中澤皓平, 2位: MUKLADA SARAPUECH / JAKKREEPHAT PUETTISAN, 3位: 津田雄飛 / 田中啓介)



JP250 4時間耐久ロードレース/ナショナル4hours表彰式 (優勝: 橋本範行 / 遠藤弘一, 2位: 三浦雄一 / 井手瑤輔, 3位: 片岡匡史 / 榊原浩二)

レースレポート

毎回ハイレベルなバトルが披露されてきた<ST600>4耐は7月8日(土)に公式予選が行われ、翌9日(日)に決勝レースという日程。このカテゴリーにはインドネシアからASTRA HONDA RACING TEAMとYamaha Racing Indonesia Gen Blue Teamが参戦。7月7日(金)の特別スポーツ走行から圧倒的な速さを披露していたYamaha Racing Indonesia Gen Blue Teamがなんと公式予選で転倒し、予選不通過に。同じく公式予選ではMOTO WIN RACINGから参戦している4台の内、#58のRider YELLOW塚原溪介が唯一の2分15秒台、さらにコースレコードを更新する2分15秒295をマークしながらNIPPOコーナーで転倒。マシンの修復は公式予選中に完了してRider BLUE村瀬豊もタイムアタックしたことから、#58 MOTO WIN RACINGは5番グリッドからのスタートとなった。

ル・マン式により、12時にレースがスタート。ポールポジションからスタートしたASTRA HONDA RACING TEAMのHERJUN ATNA FIRDAUS (HERJUN ATNA FIRDAUS/MOHAMMAD ADENANTA PUTRA組)が出遅れるが、オープニングラップをトップで終了したのはそのHERJUN ATNA FIRDAUS。公式予選での転倒によりライダーが負傷し、最後尾からのスタートとなったYamaha Racing Indonesia Gen Blue Teamは変更したライダーの松岡玲が、なんと一気に35台をパス、2番手でオープニングラップを戻ると、2周目のスプーンカーブでHERJUN ATNA FIRDAUSをパスしてそのまま単独トップに立った。その後方でHERJUN ATNA FIRDAUS、村瀬(村瀬/塚原組)がテールtoノーズのバトルを展開する。

16周目終了時点で鈴木(青田魁/鈴木慎吾組)がピットイン。青田にライダーチェンジする。コースのところどころで雨が降り始めた19周目の2コーナーで5番手走行中の西山(西山尚吾/富江慧組)が転倒。これによりセーフティカーが導入される。このタイミングで松岡がピットイン、ANDI MUHAMMAD FADLYにライダーチェンジする。セーフティカーランの前にHERJUN ATNA FIRDAUSをパスしていた村瀬、そしてHERJUN ATNA FIRDAUSも24周目終了時点でピットインし、それぞれ塚原、MOHAMMAD ADENANTA PUTRAにチェンジしていく。MOHAMMAD ADENANTA PUTRAが26周目のヘアピンで塚原をパス。ANDI MUHAMMAD FADLY、MOHAMMAD ADENANTA PUTRA、塚原のオーダーとなる。ペースの上からANDI MUHAMMAD FADLYにMOHAMMAD ADENANTA PUTRAが徐々に接近。しかし、パスされる前の41周目終了時点でANDI MUHAMMAD FADLYがピットインし、松岡にライダーチェンジする。その後もリードを守ったYamaha Racing Indonesia Gen Blue Team (松岡/ANDI MUHAMMAD FADLY組)が100周を走りきり、総合優勝を飾ると同時にインター4hoursを制した。同2位には同一周回でASTRA HONDA RACING TEAM (HERJUN ATNA FIRDAUS/MOHAMMAD ADENANTA PUTRA組)、同3位には#52のMOTO WIN RACING (青田魁/鈴木慎吾組)という結果となった。

ナショナル4hoursのウィナーは総合4位のKRT・RTトロク&遊心・RT五十歩百歩(倉田智宏/岡村健組)。総合6位のオートライフハノ+ADF+乱乱(羽野慎一/中谷亜加音組)がST600R (Revival) クラス優勝を決めた。

なお、鈴鹿サンデーロードレースにおけるST600R (Revival) は今シーズンが最終開催年。このクラスの4耐も今回が最後となる。



トップチェッカーを受けたのはYamaha Racing Indonesia Gen Blue Team
4時間におよぶレースが終わり、コンビを組んだ松岡玲(左)とANDI MUHAMMAD FADLYが健闘を称え合う



ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>/総合表彰式 (優勝:松岡玲/ANDI MUHAMMAD FADLY, 2位:HERJUN ATNA FIRDAUS/MOHAMMAD ADENANTA PUTRA, 3位:青田魁/鈴木慎吾)



ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>/ナショナル4hours表彰式 (優勝:倉田智宏/岡村健, 2位:中堀拓己/樽見隼, 3位:岡本淳希/柏原信太郎)



ブリヂストン鈴鹿4時間耐久ロードレース<ST600>/ST600R (Revival) 表彰式 (優勝:羽野慎一/中谷亜加音、2位:井上正光/松谷竜真、3位:榊原健二/中西宏明)